

情報リテラシー科目の学習者の振り返りと情報活用の実践力との関連

A Relation between Learners Reflection and Skills of Practical Use of Information in Information Literacy Classes

記谷 康之

Yasuyuki KITANI

広島修道大学経済科学部

Faculty of Economic Science, Hiroshima Shudo University

Email: ykitani@shudo-u.ac.jp

あらまし：情報リテラシー科目における授業活動と情報処理に関する意識の変化との関連について、学習者の振り返りと情報活用の実践力を調査し、授業改善を目的として検証を試みた。結果から情報リテラシー科目の学習活動への肯定的な自己評価が見られたが、情報活用の実践力への関与は明確に見いだせなかった。

キーワード：情報リテラシー教育、学習者の振り返り、情報活用の実践力尺度

1. はじめに

本学では全学共通の情報科目として「情報処理入門」、「情報処理基礎」を開講している。「情報処理入門」は、基本的な情報リテラシー習得をねらいとしている。全学的な情報リテラシー構築の出発点として、学生が入学後の早い段階で習得すべき技能・知識の指導を担っている。「情報処理基礎」は情報リテラシーに関する総合力の向上、ソフトウェア活用の知識と技能の習得をねらいとしている。

両科目は授業改善を目的として学習状況や情報処理に関する意識について履修者に対して継続的に調査を実施している。

本研究では、学習者の振り返りと情報活用の実践力について調査し、授業活動と情報処理に関する意識の変化との関連について検証を試みる。

2. 調査方法

2016年度に全学共通情報リテラシー科目「情報処理入門」、「情報処理基礎」を履修した学生を調査対象とした。

学習者の振り返りは毎回行った授業アンケートを使用した。情報活用の実践力は情報活用の実践力尺度を使用し、授業期間中に学期はじめと学期末の二度回答させた。いずれも Web 上に提示した電子アンケートで実施した。

調査項目の構成

1) 情報活用の実践力尺度(高比良ら, 2001)^[1]

情報活用に関係する、収集力、判断力、表現力、処理力、創造力、発信・伝達力(以下、伝達力)を下位尺度として総合的に能力を自己評価する 54 項目からなる尺度である。「人と違った意見を考えるのは苦手である」などの項目に「まったくあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの 7 件法で回答させる。回答はそれぞれ 1 点から 7 点に割り当て点数化した。

2) 授業アンケート

毎回授業終了時に学習の振り返りを促す授業アンケート(以下、振り返りアンケート)を回答させている。設問は成長度、理解度、気づきを選択肢で、また授業について全体的な感想を自由記述で入力させる(表 1)。

表 1 振り返りアンケート項目

- | |
|--|
| 1. 今日の授業で成長・進歩したと感じられるか?[成長度]
Yes, No, ? のいずれかを選択 |
| 2. 今日の授業の理解度はどうでしたか?[理解度]
6段階の理解度, 「既に理解済み, 退屈」「ほとんど理解できる」「2, 3わからない」「半分わからない」「わからないことが多い」「全くわからない」のいずれかを選択 |
| 3. あなたにあてはまることはどれですか?[気づき]
6つの授業に関する気づき, 「何かわかった」「何か面白かった」「何かできた」「満足した」「工夫した」「がんばった」を選択, 複数選択可 |
| 4. 振り返ってみて成長・進歩の理由, 授業について書いてください?[自由記述] |

3. 結果と考察

情報活用の実践力尺度の回答とアンケートの回答の両方に不備のない情報処理入門履修者 140 名(以下, 2016 入門), 情報処理基礎履修者 63 名(以下, 2016 基礎), 計 203 名を分析の対象とした。

情報活用の実践力尺度

情報活用の実践力尺度は, 54 項目の合計点を求め, 学期始めと学期末を科目ごとに比較した。2016 入門の平均点は学期始め 215.4(SD 14.8), 学期末 213.8(SD 17.9)で学期末が低かった。2016 基礎の平均点は学期始め 212.3(SD 33.3), 学期末 219.3(SD 23.2)で学期末が高かった。実践力尺度は学期始めと学期末の間に有意差は認められなかった。実践力尺度のあらかず情報活用に関する意識や態度について授業による変化は示されなかった。

振り返りアンケート

振り返りアンケートの回答は質問項目ごとに割合, 回答数をそれぞれ求めた。[成長度]の項目は学期全体の選択肢の総計を回答総数で除して選択肢の割合を求めた。2016 入門は Yes の選択が 87.5%, No が 3.0%, 未選択が 9.5%であった。2016 基礎は Yes の選択が 84.5%, No が 3.3%, 未選択が 12.2%であった。Yes の選択が多いが, 少しでも学習における肯定的な変化があったことをとらえているものと推察される。

[理解度]の項目も学期全体の選択肢の総計を回答総数で除して選択肢の割合を求めた。2016 入門は「既に理解済み, 退屈」が 4.1%, 「ほとんど理解できる」が 64.7%, 「2, 3 わからない」が 16.6%, 「半分わからない」が 5.4%, 「わからないことが多い」が 2.9%, 「全くわからない」が 0.7%, 未選択が 5.8%であった。2016 基礎は「既に理解済み, 退屈」が 3.4%, 「ほとんど理解できる」が 62.6%, 「2, 3 わからない」が 17.4%, 「半分わからない」が 3.5%, 「わからないことが多い」が 2.6%, 「全くわからない」が 1.0%, 未選択が 9.5%であった。平均的に 60%以上の履修者が学習内容を理解し, 「2, 3 わからない」の回答を含めると 80%以上がおおよそ学習内容を理解していると考えられ, [成長度]の項目の回答に対応しているものと考えられる。

[気づき]の項目は複数選択を認めているため, 学期全体の選択肢の総計を回答者数で除して学期中の選択回数を求めた。2016 入門は「何かわかった」が 5.1 回, 「何か面白かった」が 2.4 回, 「何かできた」が 3.2 回, 「満足した」が 1.7 回, 「工夫した」が 0.4 回, 「がんばった」が 3.4 回であった。2016 基礎は「何かわかった」が 4.9 回, 「何か面白かった」が 3.8 回, 「何かできた」が 3.4 回, 「満足した」が 2.9 回, 「工夫した」が 1.4 回, 「がんばった」が 5.1 回であった。両科目とも平均的に学期中 3 分の 1 は何か発見があったと感じている。また 2016 基礎の方が全体的に 2016 入門よりも気づきの回数が多かった。学習内容の理解以外に授業活動への関与や体験について振り返りを行っていると考えられる。

[自由記述]の項目は回答字数の平均値を求めた。2016 入門は 18.3 字, 2016 基礎は 26.7 字であった。文字通り 1 行コメントで振り返りを行っていると考えられる。

情報活用の実践力尺度と振り返りアンケートとの関連

振り返りアンケートの質問項目ごとの割合, 回答数と学期末の実践力尺度との相関係数を科目ごとに求めた。どの項目も統計的に有意な相関は認められなかった。振り返りアンケートの結果からは, [成長度], [理解度]に多くの履修者が学習活動への肯定的な自己評価をしており実践力への変化を示唆している。情報活用に関する意識との関わりを見るには, 評価の対象となる授業活動の限定が不十分になっているか, 実践力尺度の項目が広範なために明確な関与を示さなかった可能性がある。

学習者の振り返りと情報活用に関する意識との関わり観点から授業改善への示唆を得るためには, 尺度の項目と振り返る評価対象とをより特定化して設定する必要がある。

参考文献

- [1] 高比良美詠子, 坂元章, 森津太子, 坂元桂, 足立れか, 鈴木佳苗, 勝谷紀子, 小林久美子, 木村文香, 波多野和彦, 坂元昂: “情報活用の実践力尺度の作成と信頼性および妥当性の検討”, 日本教育工学会論文誌, Vol.24, No.4, pp.247-256 (2001).